

# FORUM

Vol.10

大阪府立大学  
高等教育開発センターニュース  
「フォーラム」

## 第10号

### CONTENTS

新任教員FD研修報告 ..... 2

総合教育研究棟竣工記念シンポジウム  
(2008年度第1回FDセミナー) 報告 ..... 3

JCSS結果報告(1) ..... 6  
—大学に対する満足度の規定要因—

編集後記 ..... 8



大阪府立大学  
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

# 新任教員FD研修報告

友好祭期間中の5月23日(金)、午後3時より2時間にわたり平成19年度および20年度新任教員(中百舌鳥キャンパス所属)を対象とした「新任教員FD研修」が、高等教育開発センタースタッフの講演と質疑応答という形で開催された。

はじめに奥野武俊高等教育開発センター長により、府立大学が果たすべき役割としてのABCD(Application:活用;Bequest:継承;Creation:創造;Dialogue:地域貢献)が述べられ、次に、今の時代の教員として、教員自ら学ぶこと、学生の個性を引き出し、学問のおもしろさを知らせる教育を行うこと、そして学生の学習成果を保証することが強く求められていることが述べられた。引き続き、センタースタッフ3名からの講演がなされた。まず、高根先生から「大阪府立大学におけるGPAとCAP制について」のテーマで、制度導入の背景と目的、運用についての説明がなされ、CAP制が単位制度に基づく授業学習を保証するためのものであること、GPAの適切な運用が厳格な成績評価、学生への履修指導の徹底、授業内容の充実につながる話が話された。高橋先生からは、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会の審議のまとめ「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえ「大学設置基準の改正と中教審の新たな答申について」のテーマで、大学設置基準の改正に伴うFDの義務化、そして、学士課程教育の在り方、学士力に求められているものなどについての説明がなされ、府立大学としての大学設置基準改正への対応、大学全体として教養教育の在り方、評価の基準などの学士課程教育などについて考えていく必要があることが述べられた。最後に、保田先生からは「全学授業アンケートの概要とこれまでの知見」というテーマで、平成17年度から実施されている学生ポータルサイトを利用した授業アンケートの実施概要、自由記述欄を利用した授業改善法などが紹介されると共に、総合的満足度や理解度、受講態度や予習復習時間の実態などに関する解析結果が示され、アンケートが教育改善に役立つものであることが述べられた。各々の講演に対して参加者からの活発な質問がなされ、また、研修の最後に実施したアンケートでも本研修が有意義であった、各講演内容がよく理解できたという回答が多くを占めた。

高等教育開発センタースタッフとしては、新たに赴任された先生方に府立大学が目指す大学教育に向けた改革の取り組みを十分に理解していただけたことから、今後、積極的に教育改革に取り組んでいただけるものと期待している。

(宮本)

REPORT

# 総合教育研究棟 竣工記念シンポジウム (2008年度第1回FDセミナー)

報告

統合法人化した大阪府立大学は、今年で4年目を迎えました。新大学におけるキャンパスプランの最初の成果として、この春には総合教育研究棟が竣工し、4月から供用が開始されています。そこで、3大学統合の象徴とも言えるこの総合教育研究棟の竣工を記念して、今年度第1回のFDセミナーを兼ねたシンポジウムを7月4日(金)に開催いたしました。

大学は今、グローバル化し急速に変化する社会にあって、将来を担い出る人材を送り出すことを社会から期待され、また、その期待に応えるために大学自身にも変化が強く求められています。そこで、本シンポジウムでは、「今、大学教育に求められるもの」というテーマのもと、様々な立場の方々と一緒に、大阪府立大学における今後の教育について議論いたしました。

## プログラム

### <第1部>

基調講演 「学士課程教育の理念とその実現」

絹川 正吉(新潟大学・理事、国際基督教大学・前学長)

### <第2部>

パネルディスカッション「府大における学士課程教育を考える」

「首都大学東京の取り組み」

上野 淳(首都大学東京・基礎教育センター長)

「府大におけるこれからの取り組み」

辻川吉春(工学研究科)、大木 理(生命環境科学研究科)、村澤康友(経済学部)、

吉田敦彦(人間社会学部)、山口義久(総合教育研究機構)

司会:高橋哲也(高等教育開発センター)

総括(府大の将来に向けて)

奥野 武俊(総合教育研究機構長)

第1部では、昨年度第2回のFDセミナーにもお越しいただいた絹川正吉先生を再びお招きして、「学士課程教育」という理念が近年盛んに取り上げられるようになってきた背景、「学士課程教育」において育成されるべき「学士力」、そして「学士力」を育成するためには具体的に何をなすべきなのかについて、ご講演いただきました。

「学士課程教育」という言葉は、先ごろ中央教育審議会大学分科会がまとめた「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（学士課程答申）で広く知られる事となりましたが、もともとは1991年のいわゆる大綱化答申に関連して、一般教育学会（のちの大学教育学会）が大学審議会への提言の中で用いたのが最初であることを絹川先生はご紹介下さいました。そこでは、「専門教育」と「一般教育」とが分断・階層化されている当時の状況下で、大学4年間を一貫した教育課程として捉え直そうとする理念の表現として、この言葉が用いられたそうです。そして、先の「学士課程答申」のなかでも、この理念が踏襲されています。

この「学士課程答申」や、2005年に出された中教審答申「我が国の高等教育の将来像」で語られている教育は、リベラルアーツ教育を一つのバックグラウンドとしています。しかし、リベラルアーツ教育は本来エリート教育であり、現在のユニバーサル段階（大学進学率が50%を超え、多様な学生が混在して学んでいる状況）にある高等教育の現状には必ずしも合致していない点を、絹川先生は指摘されました。また、「学士課程答申」の中では、大学において養成されるべき「学士力」として、「知識・理解」「汎用的技能」「態度・指向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」が挙げられていますが、その中で、知識を活用して何ができるようになったか（いわゆるコンピテンシー）が特に重視されています。絹川先生は、このようなコンピテンシー教育が従来のリベラルアーツ教育の中でも行われてきたとする考え方を紹介されると同時に、現在のユニバーサル段階にある大学の現状で、それが有効に機能するためには、いわゆる「初年次教育」（学生の大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく作られた、新入生向けの総合的教育プログラム）が特に重要になってくることを指摘されました。

では、学士力を育成するためには、いったい何をなすべきなのか。絹川先生は、「クリティカル・シンキング」を教育の中核にすべきであると主張し、すべての科目がクリティカル・シンキングを育成する視点に立つ必要があると述べられました。また、クリティカル・シンキングは、講義の中で「批判的に物事を考えよ」と単に注意するだけで身に付くものではなく、グループ学習などを通じて学生が自己の考え方を相対化させていく中で育成されるものであることを指摘されました。その一方で、高等教育機関としての大学教育の本質は、従来からの専門（ディシプリン）教育にあります。学士力の育成にあたっては「学術基礎教育」という考え方を提唱され、専門（ディシプリン）教育との連関を意識しつつ表現力や思考力の育成を図るべきだと述べて、ご講演を締めくくられました。



上野 淳 先生（首都大学東京・基礎教育センター長）

総合教育研究棟は、専門基礎教育と教養教育を行う中心的な場としての役割を担っていますが、絹川先生のご講演を拝聴して、総合教育研究棟における教育が、学士課程全体を通じた教育においても大変重要な意味を持つことをあらためて感じました。また、大阪府立大学での今後の学士課程教育を考える上で、絹川先生のご講演は、たいへん示唆に富むものだったと言えるでしょう。

第2部のパネルディスカッションでは、大阪府立大学の「学士課程教育」を今後どのように構築していくべきか、6名のパネリストの方々の発表をもとに、議論を深めました。

まず、パネリストのおひとりとしてお招きした首都大学東京・基礎教育センター長の上野淳先生に、同大学の基礎教養課程の概要、これまで



絹川正吉 先生（新潟大学・理事、国際基督教大学・前学長）

の取り組みと課題についてお話しいただきました。同大学の基礎教養課程は、「都市教養プログラム」（教養科目に相当）、「基礎ゼミナール」、「実践英語」、「一般情報」の4つの科目群から構成しており、それぞれについて詳しくお話しいただきました。これらの基礎教養課程の科目に対する学生の満足度はおおむね良好であるものの、学生の自宅学習時間が非常に少なく、単位の実質化という観点からも、また学習に対する充実感を高めるという意味でも、このあたりが今後の大きな課題であるとのことで、府大と似通った状況もあるようです。

続いて、学内の提題者として、所属部局のそれぞれ異なる5人の先生に、学部学科等の代表としてではなく、個人として、府大の教育のありかたについて、ご意見を述べていただきました。

工学研究科の辻川先生からは、工学部の状況を中心にご報告いただきました。工学部の専門課程の教育に関しては、課題発見能力・問題解決能力を涵養する創成型科目の導入や、JABEE受審への対応などから、おおむね中教審の掲げる「学士力」をイメージできるカリキュラム編成になっていると考えているが、その一方で、総合教育研究機構が開設する専門基礎科目や教養科目との連携については、多くの課題を残しており、それを克服するためのカリキュラム設計が重要で、専門組織の設置は難しいにしても、少なくとも十分な意見交換が行える場が必要だとの提案がありました。

生命環境科学部の大木先生は、大学への提案として、カリキュラムデザインは一般の教員が片手間にやるものではなく、本当の専門家が必要であること、そして、府大の学士課程でどのような学生を育てるのかについては、大学全体でブランドデザインする必要があることを訴えられました。

経済学部の村澤先生は、現在のFDをめぐる議論の問題点として、もっぱら個人的な信念や経験に基づく議論ばかりで、客観的なデータ分析に基づく実証研究があまりにも少ないことを指摘されました。ご自身も「数学と経済学」というテーマで経済学教育に関する実証研究を発表しておられますが、ほかにも「少人数教育の効果」「補習授業の効果」「成績の決定要因」など、科学的・実証的研究が必要なテーマが多数あり、インセンティブの導入等によって研究を促進するとともに、学内での活発な研究交流が必要であると提案されました。

人間社会学部の吉田先生からは、中教審が言うところの「21世紀型市民の育成」「学士力」といった理念を実践した教育の先駆的なものとして、旧大阪女子大学において、1999年から2006年まで運営されてきた「地球市民ボランティア副専攻」のことが紹介されました。

総合教育研究機構統括の山口先生は、まず各学部と機構の間にある理念的な対立に言及され、府大の今後の教育を考える上で、のりこえなければならない大きな課題であることを指摘されました。そして、機構内で5月と6月に開催した2回のプレシンポジウムの議論の成果を踏まえて、科目は異なっても、例えばクリティカル・シンキングのような共通の教育目標を立てることは可能であり、特に「同じ事柄を多角的な視点から見ることができる」という意味での幅広い教養を身につけた学生を育てることが重要だと提案されました。ただ、全学的な視野からカリキュラムについてさまざまな可能性を話し合うことが必要で、それが本来のFDのあるべき姿（前向きなFD）でもあると主張されました。

このあと、フロアをまじえて、質疑応答と活発な討論が約1時間にわたって行われ、絹川先生からも貴重なアドバイスをいただきました。最後に、理事・総合教育研究機構長の奥野先生より、「学士課程教育を全学の部局が一緒に考えよう」という総括ならびに決意表明の言葉をいただきました。また、「学士力」の育成を目指して、基礎ゼミナールなど初年次教育の工夫、体系的な教養科目（副専攻など）の開設、専門の勉強をある程度積んだ3・4年次向けの教養科目の開設などを具体的に提案されました。

シンポジウムが終わって時計を見ると4時間を超えておりましたが、時間の経つのを完全に忘れるほど、充実した内容だったと思います。所属部局や担当科目の違いを超えて、教員同士が率直な意見交換のできるこうした機会を今後も増やしていければと感じています。

（星野・谷口）



パネルディスカッション「府大における学士課程教育を考える」



# JCSS結果報告(1)

## — 大学に対する満足度の規定要因

昨年度後期、本学2・3年生を主たる対象として、JCSS (Japan College Student Survey) 調査が実施されました。同調査は、UCLAのアスティン (Astin, A. W.) 教授が開発した全米でも定評のある大学生調査CSS (College Student Survey) に基づき、同志社大学の山田礼子教授らが開発されたもので、2004年に初めて試行調査が行われ、今回は国公立大学16校6,228名の学生を対象として2007年12月から2008年1月にかけて実施されました。調査の目的を山田教授は次の3項目にまとめておられます。

- ・長期的に複数の機関で継続的に実施できる情緒的側面を重視した学生調査の開発
- ・複数の機関で教育効果を測り、教育改善につなげられる汎用性のある学生調査の開発
- ・魅力ある大学づくりにつながる学生調査と分析手法の開発

(山田教授講演「魅力ある大学とは～学生調査から教育効果を探る～」要旨

<http://www.atmarkit.co.jp/ad/spss/directions2007/directions01.html>)

同調査の設問内容は、学習行動・学習意欲をはじめとして、大学の満足度・充実度、能力の自己評価や能力観、価値観に至るまで非常に多岐に亘っており、設問数もかなりのボリュームがあります。調査票や単純集計結果(16大学全体・府大全体・学部別)はポータル電子掲示板から閲覧することができます(6月2日掲示開始)。本誌では、今回以後数回にわたって、同調査の府大データの分析結果をご紹介します。

さて今回は、大学に対する学生の満足度に焦点を当てて分析してみました。満足度に関する項目は大項目で二つありますが、一つは授業をはじめとして大学が提供するサービスを個々に詳細に問うているのに対し、もう一つは他の学生や教員と話をする機会や学生数など、より幅広い内容となっております。後者の中に「大学での経験全般

について」の満足度を評定する小項目がありますので、ここではこの小項目を大学に対する満足度の総合評価と見做し、その他の個別的な項目がどれほどこの総合満足度と関連しているかを調べる(重回帰分析)ことにより、総合満足度の規定要因を探りました。上記のように二つの大項目では設問の趣旨が若干異なり、またそれぞれに十数個以上の小項目がありますので、ここでは総合満足度の小項目が含まれる、より広範な内容の大項目(先程の後者)のみ扱います。なお、学部によって実情は多かれ少なかれ異なるものと予測できますが、一定のサンプル数を確保するため、理系(工・生命環境・理)、文系(経済・人間社会)、医療系(看護・総合リハビリテーション)の三つの学部群に大きく分けて分析を行いました。結果はそれぞれ表1・表2・表3です。

■ 表1 府大に対する総合的な満足度の規定要因  
—より広範な内容を説明変数とした重回帰分析—  
(理系学部)

説明変数(小項目)	$\beta$
多様な考え方を認め合う雰囲気	.238 ***
大学における学生交流の機会	.187 ***
他の学生と話をする機会	.158 ***
授業の全体的な質	.108 ***
専門分野の授業	.097 **
教員と話をする機会	.091 **
調整済みR自乗	.346
F	97.920 ***

\*\*\*p<.001 \*\*p<.005

■ 表2 府大に対する総合的な満足度の規定要因  
—より広範な内容を説明変数とした重回帰分析—  
(文系学部)

説明変数(小項目)	$\beta$
多様な考え方を認め合う雰囲気	.380 ***
授業の全体的な質	.183 ***
大学における学生交流の機会	.139 ***
キャリア計画に対する授業内容の有効性	.098 *
他の学生と話をする機会	.091 *
調整済みR自乗	.465
F	100.365 ***

\*\*\*p<.001 \*p<.05

■ 表3 府大に対する総合的な満足度の規定要因  
—より広範な内容を説明変数とした重回帰分析—  
(医療系学部)

説明変数(小項目)	$\beta$
大学における学生交流の機会	.261 ***
多様な考え方を認め合う雰囲気	.242 ***
他の学生と話をする機会	.177 ***
日常生活と授業の内容との関連	.154 ***
教職員による学生支援体制	.140 **
授業の全体的な質	.104 *
調整済みR自乗	.532
F	63.183 ***

\*\*\*p<.001 \*\*p<.005 \*p<.05

表1から表3を見渡すと、総合的な満足度(「大学での経験全般」に対する満足度)の規定要因として、「多様な考え方を認め合う雰囲気」(に対する満足度)の関連が強く、「授業の全体的な質」などを凌ぐ値を示しております。これは多少とも意外な結果かもしれません。その他にも、「大学における学生交流の機会」や「他の学生と話をする機会」といった、どちらかといえば授業以外の(あるいは授業も含めた)人間関係、特に学生間のそれに対する満足度が、総合的な満足度を相対的に

強く規定していることがわかります。

学部群別では、理系および医療系で上記のような人間関係に関する満足度の項目が上位を占めている一方、文系では「授業の全体的な質」の $\beta$ 値が二番目に大きくなっております。また「専門分野の授業」「教員と話をする機会」は理系のみ、「キャリア計画に対する授業内容の有効性」は文系のみ、「日常生活と授業の内容との関連」「教職員による学生支援体制」は医療系のみ有意です。

(保田)

## 編集後記

FORUM第10号をお届けします。新大学発足とともに産声をあげた高等教育開発センターも4年目を迎えましたが、この間、周囲の状況は大きく変化しました。「FDといえばフロッピーディスクという冗談」が冗談として通じなかった発足当初に比べ、今や、学部・大学院でのFDの義務化に加え、授業改善のみでなく、カリキュラムポリシーの策定など、センターに期待される役割も大幅に増えてきました。

今回のFORUMでも「新任教員FD研修」の報告や昨年度に実施した「JCSS(学生調査)」の報告など新しいものが含まれています。FDセミナーは総合教育研究棟竣工記念シンポジウムという形で行われ、センターはサポートに廻る形でした。このように、部局のFDセミナーをセンターがサポートするというのも今後のセンターの重要な仕事かもしれません。大学の教育を良くしていくことにどうやって貢献できるかを今後も追い求めて行きたいと思います。

(高橋)

### 大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成20年8月8日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学  
総合教育研究機構 高等教育開発センター  
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1  
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>

印刷所 くすの木印刷  
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21